〈連載〉

写真・文：飯沢未央

コンビニから考える『文化と生物学』0 回

コンビニは小さな生態系

私たちの日常になくてはならない「コンビニ」。そんな身近なコンビニだからこそ、『文化と生物学的』な事象が潜んでいる、ような気がする。まずはコンビニは小さな生態系であるという仮説を立てることから始めてみる。

Figure 1. 発光する夜のコンビニエンスストア。

『文化と生物学』で「食」をテーマに連載を持つことになった。そこで身近な食について考えていたところ、ふと浮かんだ情景が「コンビニ」だった。

日常生活の中に、当たり前のように存在しているコンビニ。そんなコンビニの存在についてじっくり考えると、コンビニ的センスオブワンダーが広がっていることに気づく。

おにぎりやパン、麺類、お惣菜、冷凍食品、お菓子、日用品、雑誌等が店頭に並び、レジには揚げたてのホットスナック、おでん、タバコも買える。私たちは無作為に商品を購入し、買った商品は雑誌も、お菓子もドリンクも一つの袋にまとめられる。そして混沌とまとめられた商品たちを、自分たちの巣に持ち帰る。

「コンビニ」について考え始めたとき、第 155 回芥川賞を受賞したことでも話題になった村田沙耶香著『コンビニ人間』を読んだ。コンビニのアルバイト歴 18 年目の主人公が、「店員」でいるときのみ世界の歯車になれる生きがいを持ち、日々コンビニ食を食べ、夢の中でもレジを打ち、コンビニでできた人間としての眼差しで捉えた世界を綴った小説だ。

『コンビニ人間』では、随所にコンビニを生き物を見るように「観察」する表現が出てくる。

“いろいろな人が、同じ制服を着て、均一な「店員」という生き物に作り直されていくのが面白かった。その日の研修が終わると、皆、制服を脱いで元の状態に戻った。他の生き物に着替えているようにも感じられた。”

“18 年間、「店長」は姿を変えながらずっと店にいた。一人一人違うのに、全員合わせて一匹の生き物であるような気持ちになることがある。”

“こうして、また一つ、店の細胞が入れ替わっていく。”

—『コンビニ人間』（文藝春秋）村田沙耶香

「コンビニ」の内部は生き物と同じように代謝する世界のようだ。

あらためて「コンビニ」は小さな生態系であると思う。夜中にポツンと明るく光る「コンビニ」を見つけると、海中でバイオルミネッセンス（生物発光）する魚やプランクトンで構築された生態系を想像する。コンビニに立ち寄る私たちは、ホタルイカを捕獲する漁師のように商品を購入する存在であり、またチョウチンアンコウにおびき寄せられる小魚のように、「コンビニ」に捕食される存在でもある。

生態系は多様な生物種で構成されており、それぞれが特定の役割を持っている。同様に、「コンビニ」は多様な商品やサービスを提供し、顧客の持つさまざまなニーズや要求に応える。

そして「コンビニ」では生物間相互作用のように、多様な商品が関係し合い、顧客のニーズを刺激する。おにぎりだけ購入するつもりのはずが、隣に陳列されているお茶も買い物かごに入れてしまう。また洗剤を買うつもりで店舗に立ち寄ったつもりが、お菓子も購入している、といったようなことは多々ある。そして、

それぞれの商品は顧客の目に留まるよう配置され、私たちは店内での滞在時間を延長している。

ドイツの生物学者であるヤーコプ・フォン・ユクスキュルが著書『生物から見た世界』で提唱している「環世界」という概念があるが、私はそれぞれの商品にも環世界と同じように、それぞれの主体的に構築した世界があるのではないかと考える。おにぎりはおにぎりの世界、冷凍食品には冷凍食品の世界がある。それぞれの世界の商品たちは、その「環世界」の中で息づく。私たちはコンビニの循環を作り出す存在として、コンビニ環世界の外側から手を入れ、商品を選ぶ。

本連載では、『コンビニ人間』の主人公のように、また昆虫採集に没入する子どものように、「コンビニ」を構成する様々な文化と生物学的な世界を採り出して覗いていく。まずは唐揚げか、おにぎりか。

参考文献

『コンビニ人間』（文藝春秋）村田沙耶香
『生物から見た世界』（岩波書店）ユクスキュル／クリサート著、日高敏隆・羽田節子 訳

飯沢未央（いいざわ・みお）
『文化と生物学』ディレクター。動物や植物に限らず、生命の挙動や個性に興味を持ち、デバイスアート、パブリケーションなど、多様なプロジェクトを手掛けている。また本にまつわる事象への興味から、メディア何でも書店「TRANS BOOKS」の運営・企画も行う。昨年から生け花を始めた。
http://iimio.com/